SINAPIS

月刊シナピスニュースレター

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

Vol. 78

2022.11

年間テーマ　～ 互いに耳を傾けよう ～

今月のテーマ

「未来の担い手へ」

タイトル:「いつもの午後の演奏会」
作：鳥羽（とば）　百合（ゆり）さん

第１回シナピス主催絵画コンテスト
大司教賞受賞作品

地上でもっとも小さいといわれている種子、
それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、
互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると
約束しました。

カトリック大阪大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784　FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@osaka.catholic.jp
ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

巻頭言　未来の担い手へ

教区・船員司牧担当
シナピス・子ども基金　担当
エリック・バウチスタ・デ・グスマン

子どもたちが私たちの未来の希望だとよく言われます。私たちが今歩んでいる道は将来、今の子どもたちも歩むことになります。今の子どもたちに何か伝えられるのであれば、どんなことを伝えたいですか？今の課題や悩み事などを伝えますか？もちろん、楽しいことも面白いことも含めて、ぜひ伝えたいですね。

私は、次のように思っています。

今の技術の進歩により、ネットやデジタル情報は様々な形と場面で役に立っています。私は 19 年前、日本に来たとき国際電話料金がどれぐらいかかったかを思い出すだけで胸が痛くなります。今のインターネットを使った電話は、相手の顔を見ながら、何時間話しても、無料です。多くのやり取りも、キャッシュレスでできるようになり、楽になりました。自分の部屋から出なくても、お買い物も、音楽や動画鑑賞も、仕事も、銀行振り込みなどの日常生活に大切なことはほとんどネットでできます。ミサの様子を見るのもネット上でできるようになりました。

多くの命を奪ってしまった病気が、今はワクチンや治療方法、技術が進み、複雑だった治療方法や技術も簡単になりました。

しかし、私たちの試練や苦しみはまだ残っています。日常生活が便利になりましたが、人と人とのつながりが段々薄くなってきています。挨拶も様子を伺うことは直接より、ネット上で行うのが普通になってしまい、人間関係がさらに複雑になってきています。

人をご自分の姿に似せてお造りになり、いのちを与えてくださった神様のことも、軽んじられている気がします。どんなことでも人の力でできるという考え方が広まっています。そのため、人間は失敗や辛いときに、多くの人が精神的に弱くなり、生きがいを失いつつあります。

私たちは決して独りぼっちではありません。
今の子どもたちには、もっと明るい未来を迎えるために、人間関係を大切にすることと、神様への信頼を失わないことをぜひ伝えておきたいのです。

今月のページ

ニュースレター 目次

1　巻頭言
2　絵画コンテスト報告
3　子どもの本で平和をつくる⑦
4　障がい者委員会より
5　学習会報告
6　難しい海外支援活動
7　時報 11 月号より
9　核ゴミ地層処分の危険性
10　「経口中絶薬承認に反対する署名」に対する反響第3弾
13　祈りのつどい報告
14　みんなのけいじばん
16　シナピスの風
17　あとがき

チラシ・ご案内

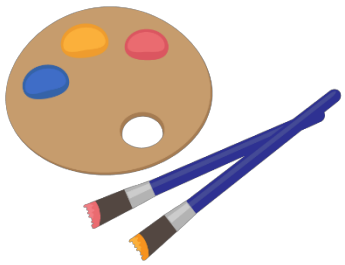
・シナピスの風
・11月の祈り
・シナピス工房カタログ Vol.6
・わすれないあきらめないカレンダー
・教皇メッセージ 2022 年「世界宣教の日」
・「死刑廃止デー」メッセージ
・生野フィールドワークのお知らせ
・死刑制度を考える講演会
・とめよう改憲　憲法講演会
・外国ルーツの子どもの在留許可を求める署名

年間テーマ

～互いに耳を傾けよう～

これは教皇フランシスコが数々のメッセージの中で、私たちに何度も呼びかけていることばです。身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。この言葉を受け、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。このニュースが皆さまといっしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

第１回シナピス主催
絵画コンテスト授賞式報告



10月1日、賞状授与式を行いました。コロナ禍で受賞者が一同に会することができず分散して行いました。

大司教賞は中学１年生の鳥羽百合さん作「いつもの午後の演奏会」でした。（今月号表紙）窓枠から外を眺めた構図で描かれた作品には、ピアノとバイオリンを演奏する少女たちとそれを聴きにやってきた鳥、へび、虫などの生き物がいます。

百合さんは作品説明で、『「平和」というテーマから自分にとっての平和とは何かを考えたら、いつも通り音楽を演奏し、それを生き物が仲良く聞いている、そんな「平和」と思えることが続く事が大切だと思った』と話してくれました。

左から鳥羽百合さんとご両親

これを聞いた前田万葉大司教は、戦争体験者とそうでない者では「平和」の捉え方も考え方も全く異なると言い、ご自身の被爆二世として過ごした長崎五島列島での幼少期を分かち合ってくださいました。戦争を知る年代、それを語り継がれた年代、語られることなく過ごすかもしれない次世代の人々がいることを目の当たりにし、教皇が仰る世代間対話の大切さの意味を改めて実感しました。

悲しいことに、世界には戦争や紛争をしている国があります。未来を担う若者たちが戦争の当事者になることがないよう「平和」について考える機会を今後も発信し続けていきます。

10月8日はシナピス賞、ピース賞受賞者の賞状授与式を対面とズームにて行いました。対面では高校生の高木郁乃莉さんと幼いセナトーレまもるさん、めぐみさん兄妹のみとなり緊張しないか不安に思いましたが、作品紹介の際「平和」に対する思いをそれぞれの言葉で語ってくれ感動しました。聖堂ツアーではセンター長が聖書の内容に触れてお話をしてくださり一緒に参加された保護者から有意義な時間だったと感想を頂きました。

左から高木郁乃莉さん、３番目セナトーレめぐみさん、４番目まもるさん

ズーム授与式には東京都から参加してくださった柳川健さん、圭さん兄弟、セントヨゼフ女子学園美術部員の堀田楚乃さん、堀田碧乃さん松永珠実さんが参加してくれました。

ここでも一人ひとりの作品に対する思いを発表してもらい、それぞれの「平和」に対する思いや取り組みを分かち合いました。恥ずかしそうに発表しながらも内容は鋭く、自分が次世代の平和の担い手になるという決意が感じられました。ズームで繋がり、場所を超えた分かち合いが出来たことに感謝します

みなさんの作品は、今後のシナピスニュース表紙で紹介していきます。

（文　事務局右知子）

子どもの本で平和をつくる　⑦

多湖敬子（たごけいこ）

ねえさんの青いヒジャブ
作：イブティハージ・ムハンマド
　　S・K・アリ
絵：ハテム・アリ
訳：野坂 悦子
出版社：ＢＬ出版
価格：￥1600+税

　みなさんは「ヒジャブ」を知っていますか？
ヒジャブは、イスラム教の女の人が髪の毛をおおいかくすのに
使う布のことです。
　この絵本は、はじめてヒジャブをつけて登校するお姉さんを、妹のファイザーの目線で描いたものです。

　今日は、ねえさんのアシヤがヒジャブを選ぶ日。
お店でママがさしだしたのは、ピンク。ピンクはママの好きな色だ。
でも、アシヤは、首をよこにふる。
どうしてか、わたしにはわかる。
だって、青いヒジャブがあったから。
それは、まぶしい海の色。
目をほそめて水平線をながめたら、
どこまでが海なのか、どこまでが空なのか
もう、だれにもわからない、
そんな青。（本文より）

　舞台はイスラム圏ではないようです。同級生の女の子はヒジャブをつけていません。なので、妹のファイザーはお姉さんのことが心配でたまらないのです。お姉さんの後を追って、そばに行ってみると、やはりお姉さんは男の子たちから、からかわれていました。
　でも、大丈夫、お姉さんは笑っています。妹のファイザーはそんな強いお姉さんがとても誇らしいのです。

　絵本のテキストが流れる詩のような文章で心地よく、ヒジャブの青い色がとても素敵です。
　そして、姉妹のママの言葉がまた格別です。
「ヒジャブのことを、わかってくれない人もいるでしょう。
でも、いつの日か、うけいれてもらえる。
あなたが、どんな自分になりたいかわかっていれば」
「ほかの人にいじわるを言われたら、その言葉をひきずっちゃだめ。
わすれなさい。あなたがおぼえていなくて、いい。
いじわるな言葉は、それを言った人のものなのよ」（本文より）

　作者のイブティハージ・ムハンマドさんは、キリスト教徒が国民の大半を占めるアメリカで育ちました。そして、アメリカの選手としてはじめてヒジャブをつけてオリンピックに出場した人なのです。
　イスラム教徒であることに誇りを持ち、「宗教や外見で人を差別するべきではない」という信念を持った彼女ですが、ヒジャブを身につけていることでからかわれたつらい経験があるそうです。

　この少女とその家族のように誇りをもってヒジャブをつける人もいれば、一方ではヒジャブの着用を拒否する人もでてきています。過日、ヒジャブの「不適切」着用を理由に、22 歳の女性が風紀警察に拘束され、その後死亡したことをきっかけにデモが始まりました。イランでのことです。そのデモは海外にも飛び火し、女性の権利拡大を求める運動などにつながっています。
　伝統を重んじるのも大切なことでしょうが、人の命や人権を奪うほどのものでしょうか？
　世界にはたくさんの国や地域があり、文化や習慣がそれぞれ違います。お互いの違いを認め、人権や個性を認め合うことができれば、もう少し住みやすい世の中になるのではないかと思います。

障がい者委員会より

障害の医療・社会・文化モデルから福音モデルへ①

障がい者委員会　吉川康夫（よしかわやすお）

①モデルの説明

（包含の図）

よく自動車や電化製品などが、モデルチェンジをします。エンジンは同じでも、見た目が変わります。先日亡くなった先輩は、「『障害』を『障碍』や『障がい』に変えても、生きづらさに変わりはない。」と言っていました。見かけだけ変えても、中身を変えないといけないと思います。

ファッション・モデルの“モデル”は、どんな意味でしょう。手本や見本という意味になります。障害の医療モデルは、個人モデルとも言います。生きづらさの原因が個人にあり、リハビリや手術によって生きづらさをなくそうという考えです。

それに対して障害の社会モデルは、生きづらさの原因は社会にあるという考え方です。障害があっても、合理的配慮により生きやすい社会にしようというものです。
バリアフリー（段差がない、エレベーターの設置）、情報保障（点字、手話、要約筆記など）などです。

② 文化モデル

ところがよく考えると、医療モデル（個人モデル）も社会モデルも障害は弱みであって乗り越える課題であると考えています。しかし弱みもあるけれど、強みもあるのです。例えば、私の障害であるADHD（注意欠陥多動症）は、不注意で忘れ物が多く気が散るという弱みがあります。しかし、いろんなものに興味を持つという強みもあるのです。

日本文化には、たくさんの良いところがあります。しかし、真面目すぎる、融通が利かない、新しいものに消極的という弱みもあります。多文化共生の時代です。外国の文化はもちろんのこと、様々な障害を持つ人々の文化に敬意をはらい、イエスさんのようにいろんな文化を持つ人々と交わりたいと望んでいます。

（「福音モデル」は、次号に）

※筆者注：障害者の「文化モデル」を障害者の「強み」あるいは「障害者文化との共生」と読み替えるとよいかもしれません。

学習会「外国ルーツの子どもの在留特別許可を求めて」

司教団からの呼びかけを力にして署名活動を！

「外国ルーツの子ども達を支援する有志の会」

9 月 23 日（金・祝）午後2時～4時、サクラファミリア（大阪梅田教会）聖堂に於いて、標記の学習会を実施しました。

「日本で生まれた外国籍の子どもの『声』を聴く会」が7月2日に夙川教会で行われ、M さんの話から、彼女と同様に基本的人権が奪われている仮放免状態の子ども達が全国には 300 人もいることを知りました。

「この状況を何とかしたい」と思う仲間が相談し、M さんと弟・S さんの声を多くの方に聴いていただく機会を作りたいと、この「学習会」を企画しました。

一家に直接寄り添ってこられたビスカルド篤子さん（シナピス）からこれまでの状況をお聞きし、M さん（大学3回生）、S さん（大学 I 回生）からは、現在の状況を話していただきました。

仮放免者には住民票・健康保険証等が無いため、病院に行けません。他県への移動も自由にできません。働く権利がないのでバイトもできません。

M さんは、2016 年に父親が強制送還されて以来、自分もいつ強制送還されるか分からないという恐怖と闘ってきました。いじめもありましたが、最も衝撃を受けたのは成人式の招待状が来なかったことでした。「自分は、地域にも日本にも存在していないことになっている」と痛感したのです。3回生となり就職活動の時期ですが、ビザの無い状態では就職できず、「将来に希望が持てない。こういう事実を広く知らせてほしい」と訴えました。

困っている人に手を差し伸べる教師になりたいと頑張っている S さんは、「日本人としてまじめに働きたいので、在留特別許可が必要です。力を貸してください」と訴えました。

これまでの裁判で弁護にあたってこられた空野佳弘弁護士は、「子どもの権利条約で保障された子どもの権利を、日本国は守らなければならない。昨年5月、廃案になった入国管理法の改悪さえ検討されており、この動きを止めないことが大切だ」と言われました。

ウィシュマさんが悲惨な最期を迎えた直後でもあり、大勢の人が入管法改悪反対の意思を示し、改悪法案が検討される前夜まで、大勢の仲間が関係各所に「改悪を許さない！」という FAX を送った結果、「政治を動かした！」と実感したことを思い出しました。

カトリック司教団は「日本を故郷と思っている子どもたちとその家族を追い出さないでください。一人でも多くの人に在留特別許可を与えてください」という法務大臣への声明を出して、ビデオメッセージによる電子署名キャンペーンを開始しました。会場でも「法務大臣への在留特別許可を求める署名」を行ない、教会・地域でも署名活動をしていただくようお願いしています。

最後に、難民移住移動者委員会担当司祭・松浦 謙神父の祈りでこの学習会を終えました。

約 60 名の参加者に書いていただいたアンケートには、「心が揺さぶられた」、「政治家の人権意識を変えたい」など、熱い思いが綴られていました。

難しい海外支援活動

難民移住移動者担当　ビスカルド篤子

教会法では、寄付金は意向に沿って使うよう定められています。シナピスも寄付の意向が不明な時には寄付者に連絡を取って確かめるように努めます。

私は2022年6月号のシナピスニュースで、「イラン国境のアフガニスタン難民につながる！」というタイトルで、イランで避難生活を送るアリさんの活動を紹介しました。アリさんは「日本から送られた少額のカンパを、助けの必要な高齢者や子どもたちのために大事に使っている」と動画を送ってくれたので、私は寄付を下さった方への御礼を兼ねてニュースで紹介したのでした。6月号のニュースを読んで、新たに寄付を送って下さる方もいらっしゃいました。

◆アフガニスタン避難民への援助活動を一時停止

そこで私たちはイラン現地で寄付者の意向通りにお金が使われているかどうかの調査をしました。そのためにはイランの現地事情を知る人にアリさんの活動を見てもらう必要がありました。

アフガニスタン避難民の事情に詳しい人に、アリさんの報告書を見てもらったところ、かなり杜撰で虚偽と思われる文書が混じっていることがわかりました。私たちは送金を止め、アリさんに援助停止の理由を説明しました。アリさんは納得がいかず「私が送った動画、見たでしょう。みんな死にそうだったけど、日本からお金届いて食べ物や薬もらって元気になった」と言いました。実は私はイラン通の人にアリさんが送ってきた動画も見せたのですが「動画なんていくらでも加工できます。こんな嘘つきが沢山いて善意の日本人を騙して同国人として恥ずかしい」と言われ、私たちはイランへの援助を一旦打ち切ったのでした。

◆娘たちからの嘆き

ある日、アリさんの娘から私に連絡がありました。「父が家族を置いて出て行った」「父は外のこどもや老人にばかり食べ物や薬を配っている。私たち家族だって空腹なのに。それで母と喧嘩になって父は出て行った。」

私はアリさんに電話をしました。「私の妻と子どもたちはまだ元気。外では助ける人が誰もいなくて死にそうな人でいっぱい。日本人はそのために送ってくれた。妻はそれがわからず怒鳴ってばかり。頭が変になる。だから出た。」「篤子さん、今はね、スマホあるから嘘つけない。日本人のお金で助かった人の動画、もっと送る。お金、最後までそれに使う。」

◆イランに避難したこどもたちへ寄付を下さった皆さまへ

アリさんのためにご寄付を下さった皆様へ。私たちは今、送金を見合わせていますので、ご寄付をお返しすることができます。ご判断が難しい場合は、一度アリさんとお話をする機会を持つこともお勧めです。彼は日本語が話せるので、ＳＮＳを通じて彼と直接話していただくことも可能です。そのうえで、お考えいただいてもよろしいかと思います。

ご連絡をお待ちしています。

時報 11 月号より

イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、
その悩みを少しでも分ち合うことのできる、
教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」
増補新版より

空の鳥を見よ

カトリック六甲教会　主任司祭　　英（はなふさ）　隆一朗（りゅういちろ）

世界中で異常気象が頻発し、疫病が流行している。現在の最大の課題はエコロジーであろう。教皇フランシスコが回勅『ラウダート・シ』でエコロジーの大切さを強調され、自然環境を守るように訴えられているのは、当然のことと思われる。そのような切迫している状況にありながら、エコロジーの取り組みは遅々として進まない印象もある。身近な問題でありながら、あまりに巨大な問題だからだ。私たちの便利な生活を諦めない限り、真の解決方法を見いだせないように思う。

自分のできる小さなことから始めようと考え、知り合いの紹介で、野鳥の保護団体の会員になった。そこから、「空の鳥をよく見なさい」（マタイ 6・26）という聖句が身にしみるようになった。

実際に、鳥を眺めるようになった。まわりには雀が多いが、時々他の野鳥が庭の木に止まっていることもある。鳥の姿を見て、その声を聞くだけで、どれほど心がいやされるか。鳥をじっと見ていると、さまざまな悩みに囚われている自分の心がほどけてくるというか、心の執着と悩みが落ちてしまって、素の心になってくるのが分かる。エコロジーの第一歩は心の平安だと思う。

さらに本格的に鳥を見たくなって（バードウォッチングほどではないが）、山や海など自然が豊かなところに足を運ぶようになる。自然の中を歩き回っていると、それだけで心身のバランスが回復してくる。緑・空・海・鳥・昆虫など、すべてがありのままに調和していて、自分の心身も自然と整えられてくる。エコロジーはいつも身体で実感する自然との一体感が基本にあると思う。

もちろん会報を読んだり、講演会を聞いたりすると、野鳥をめぐる環境がますます厳しくなっていることがわかる。渡り鳥は国境など関係なく、グローバルに世界を飛び回っていて、夏に行くところから、冬に行くところまで密接につながっている。どこかで環境破壊があると、それが全体に大きく響いてくる。プラスチック問題も深刻で、野鳥の胃袋がプラスチックでいっぱいになって死んでいる例には本当に心が痛む。結局のところ、一羽の鳥を見つめていると、グローバルな問題が切実に迫ってくる。

アシジの聖フランシスコは鳥と対話したという。もし私が鳥の声を聞けるならば、彼らの単純さや喜びだけでなく、現実の叫びと痛みを聞いてみたい。彼らの声にならない声を聞こうとするとき、統合的エコロジーの一歩が始まるでのはないか。野鳥が心から神を賛美できる環境を願いながら、自然との共生を目指していきたい。

あれから1年経ちました

正義と平和大阪大会からはじまったネットワーク

第15分科会「いま 地層処分をしてはいけない8つの理由」

札幌教区正義と平和協議会 浅井（あさい） 繁（しげる）

日本カトリック正義と平和協議会　全国集会　大阪大会から1年が経ちました。
その後も参加者と交わりを深め、取り組みを続けているグループ、また大会がきっかけとなってネットワークが立ち上がったグループがあります。今回はその中の一つをご紹介いたします。

札幌教区正義と平和協議会（以下、札幌正平協）は、昨年の正義と平和大阪大会で、「いま 地層処分をしてはいけない 8 つの理由」をテーマとして第 15 分科会を担当させていただきました。分科会開催を申し入れた当時、北海道後志管内の寿都町（すつつちょう）と神恵内村（かもえないむら）では高レベル放射性廃棄物の地層処分に向けた文献調査が開始されており、分科会ではその地層処分の危険性を学習することを目的としました。

分科会の準備も大詰めを迎えていた 11 月 5 日、日本正平協を経由して「原子力行政を問い直す宗教者の会（以下、宗教者の会）」から「核のゴミ」問題に関し、宗教者として何が出来るか意見交換をしたいとのお誘いがありました。

知事宛申入書を読み上げて担当課の課長補佐に提出

「宗教者の会」は 1992 年の「もんじゅ」初臨界を前に結成され、原発廃止に向けて、裁判を含めた各種活動を行っていますが、2020 年 9 月には最終処分場に特化したグループを立ち上げ、核ゴミ地層処分に反対する活動を始めたところでした。

会合は、基本的にリモートで開かれ、「札幌正平協」を含めたこの活動体を「核ゴミの地層処分に反対する宗教者ネットワーク」と名付けるとともに、当面の目標として、核ゴミ最終処分場を認めていない現在の北海道知事の姿勢に敬意を表明し、その姿を最後まで貫かれることを要望する申入書を知事宛に提出することとしました。申入書の提出に先立ち、北海道内の各地で学習会を実施しました。小出裕章さん、村上達也さん、澤井正子さんを講師にお招きして、旭川・帯広、函館、苫小牧（とまこまい）、黒松内町（くろまつないちょう）（寿都町の隣町）、札幌市で学習会を開催、市民活動である「泊（とまり）原発を再稼働させない・核ゴミを持ち込ませない北海道連絡会」による署名とも連携した活動が出来ました。

> **北海道における特定放射性廃棄物に関する条例 抜粋**
>
> 私たちは、健康で文化的な生活を営むため、現在と将来の世代が共有する限りある環境を、将来に引き継ぐ責務を有しており、こうした状況の下では、特定放射性廃棄物の持込みは慎重に対処すべきであり、受け入れ難いことを宣言する。

知事への申入書には、宗教関係以外で 19 の賛同団体と 8 名の個人賛同をいただき、2022 年 7 月 11 日、北海道知事宛に申入書を提出しました。

核ゴミ地層処分の具体的な危険性については「シナピスニュース 11 月号」でお知らせしますので、ぜひご覧ください。

核ゴミ地層処分の危険性

札幌教区正義と平和協議会 浅井（あさい） 繁（しげる）

大阪教区時報では、正義と平和大阪大会分科会を契機として、「宗教者の会」との共働活動（核ゴミの地層処分に反対する宗教者ネットワーク）に発展し、北海道知事に対し、核ゴミ最終処分場を認めない現在の姿勢を貫かれる申入書を提出した経過について報告しましたが、ここでは大阪大会第 15 分科会及び宗教者ネットワーク開催の学習会等で私たちが学んだ核ゴミ地層処分の危険性について報告します。

現在文献調査が進められている寿都町、神恵内村については、地質の専門家である北海道教育大名誉教授の岡村聡さんら３名が地質学的に不適地（地下の岩石は脆弱で不均質な水冷破砕岩）であるとの見解を発表し、道内外の専門家ら 62 人も賛同者として名を連ねています。また、NUMO（原子力発電環境整備機構）が発表している「科学的特性マップ」では、活断層の両側、断層長の 1%（断層長 150km の場合は 1.5km）以内の地域を埋設不適地と定めていますが、2018 年９月に実際に発生した胆振東部地震では活断層から 15km の地点（断層長 150km の 10%）が震源地で、そのような場所に高レベル放射性廃棄物の地層処分を行っていたら大事故になっていたと考えられ、NUMO の基準は全く当てになりません。

そればかりか、小出裕章さんの学習会では、日本列島自体がユーラシア、北米、フィリピン海、太平洋という４つのプレートがひしめき合う位置にあり、国内のどこにも埋設適地など存在しないことが示されました。2011 年３月 11 日の東日本大震災も、太平洋プレートが沈み込むことで発生したのは多くの人が知るところです。

では、これまでに蓄積された高レベル放射性廃棄物をどう処分するか。

日本学術会議は、2012 年９月、原子力委員会に対し、高レベル放射性廃棄物の地層処分を前提とした従来の政策を抜本的に見直すこと、地層深く埋めて管理責任を放棄するのではなく、地上における暫定保管および総量管理を柱とした政策枠組みの再構築を提案しています。

現存する核ゴミの処分は私たちの世代で道筋を付けるべきですが、更に大事なのは、これ以上核ゴミを増やさない、つまり原発の廃止が何より必要と考えています。

「経口中絶薬承認に反対する署名用紙」に対する反響を受けて　第3回

先月に引き続き、いただいたご意見を掲載いたします。

◆匿名希望

　先月号、今月号の傾向中絶薬反対問題、いやカトリック教会が中絶を禁止している問題自体についての、様々な投書に衝撃を受けています。
　中心は二点かと思います。（中絶そのものと当該薬剤の直接の結びつきは、当投稿では触れません。お許しください。）

　まず特に身体や人生の選択をめぐって、個人の自由と胎児の生存バランスの問題です。
いくらいのちが大切だからといって、望まぬ妊娠をしてしまった女性の身体の自由を脅かしてまで出産を、教会や社会が強制していいのか、さらにその女性のその後の人生の選択の自由を奪ってよいのかということでしょう。
　胎児であれば、そのいのちを、個人（大人）の自由のために犠牲にしてもよいという考えが社会にもそして今や教会の中にも見られるわけです。もし「胎児」ではなくて「生後１０か月の赤子」と置き換えれば、そのいのちは大人の自由に優先することに異を説える人は、多くはないでしょう。
　男尊女卑、女性の権利の抑圧等の問題は、当然向き合われねばなりませんが、どう議論しても、個人としての大人の自由は、一人の人として、既に存在している胎児のいのちに、優先されてはならないのだと思います。こんな私の投書の必要もないことの筈ですが、数多くの投書では、この点をあえて無視されているように見受けられます。
　第二の点は、既に触れましたが、男性中心社会（及び教会）における女性の権利擁護と抑圧する男性の責任の問題です。これは重大な事柄で、いまだ取り組みの端緒についたと言えるか言えないか、の段階でしょう。
終わりの日には社会も教会も個々の男性も、そして全世界が、このことも含めて神の御前で裁きを受けるのでしょう。
　しかしながら、このことの解決を待っていては、望まぬ妊娠と人工妊娠中絶の是非の問題は解決しません。また望まぬ妊娠の原因の一翼を担う男性の責任を同時に問えるのでなければ、女性が中絶してもその責任を問うな、というのであれば、正になんでもありになってしまいます。そして物言えぬ胎児は、生存権を踏みにじられたまま闇に葬られてしまいます。
　世界は不完全なところです。人が責任を取っていないから、私の責任を問うな、と言い始めたら、誰も責任を取らなくなってしまいます。そして一番の被害者は殺される、物言えぬ個人です（あと数か月で赤ちゃんとして生き、あと十数年で判断能力や法的責任を認められるであろう個人です）。
　力ある者が自分の自由と願いの達成を求め、力ない者にしわ寄せが来る、犠牲になる。それがこの問題の核心です。すなわち男性中心社会　対　抑圧される女性、横暴な一個人とし

ての男性対被害を受ける女性、そして自由を求める一人の大人としての妊娠者対権利を認めてもらえない胎児です。
　みんなどこかで酷い目に遭って来ているのかも知れません。ヘロデ大王に虐殺されたラマの子供たちは、ある意味、望まぬ妊娠をさせられた女性であり、男性を含めて不当に扱われてきた人たち全員のことなのでしょう。でもその中で救い主が産まれて下さったことに希望を見出したいと思っています。

◆宮永久人（みやながひさと）さん
　過日、カトリック新聞に、カトリック医師会による、英国製の経口避妊薬の危険性を訴え、これを厚生労働省が認可することに対する反対署名を呼びかける記事が掲載された。
　この記事を読むと、当の経口避妊薬が母体に危険を及ぼすから認可に反対する、と読める。では母体に危険を与えない経口避妊薬ならば認可してもよいのか。この記事に論点の錯誤を感じているのは私だけではないだろう。経口避妊薬を認めてしまえば性のモラルがさらに乱れるから、認可に反対するというのが本音ではないのか。むしろ妊娠中絶そのものを再度議論してしかるべきだろう。

　かつては中絶そのものが罪であると見なされてきた。私も生前にお会いしたコルカタの聖テレサが、自身女性であるにもかかわらず、「中絶は罪であるから、いかなる場合も産みなさい」と言ったことが知られている。しかし、今日これほど女性たちにとって酷な言葉もないだろう。特に女性差別の結果として、職業上あるいは生活を維持していくために中絶せざるを得ない状況に追い込まれた女性たちを罪人として裁くことは、神の愛に背くことだろう。そこでは強姦罪を含めた男性たちの罪、男性中心の社会構造こそ問われるべきだろう。男性の意識改革が進められるべきであり、妻の出産・育児に際して、男性たちも育児に参加しうる環境が整備されるべきである。

　他方で私は障害者の視点から、障害胎児の中絶には反対である。医療技術の進歩は胎児の「障害」の発見をますます容易なものにしている。医療現場では障害を持つ胎児の生存権は一顧だにされず、胎児の治療の可能性も検討されない。これはまさに医学モデルの発想であり、優生思想に基づくものに他ならない。
障害胎児の生存権は女性のリプロダクティブ・ヘルス・ライツ（生殖に関する権利）と衝突する。だが、女性が子どもに障害があっても育てることができる環境が整っていれば、中絶以外の選択肢も広がり得るのではなかろうか。障害者と女性の間で対話が進み、一致点が見出されることを望みたい。

翻って私たちカトリック教会である。司祭の終身独身制が敷かれているのであるが、女性が司祭職から締め出されていることもあって、男性中心の権威に基づく硬直した発想になりがちである。教会における性をめぐる議論は、この司祭独身制を固守することを前提になされているという印象を受けるのだ。その結果、教会は弱者をありのままに受け入れる包容力を失い、男女平等やセクシュアル・マイノリティへの対応が難しくなっている。
もはや教会が個々人の性倫理に関与する時代ではない。今一度、主が「私もあなたを罪に定めない。行きなさい」（ヨハネ 8:11。なお、この後に続く「もう罪をおかしてはならない」は後代の加筆とされる）と言われた主の「罪深い」女性への対応を思い起こして、赦しとい

う観点から、性倫理や中絶を考え直してはどうだろう。多くの女性が好んで中絶をするのではないのだから。
熊本・慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」は、中絶大国日本にあって、私たちの教会が成し得ているささやかなアンチテーゼであり、救いであろう。

◆匿名希望

最近、NPO 法人「円ブリオ基金センター」の設立母体である「生命尊重センター」に賛同しそれを後援する動きが、教会の公の立場にある人々に見られます。これに関して胎児の人格が尊重され子どもを産み育てる権利が保護されることに賛同はしても、そのことについての意見の取り扱い方や表明の仕方に、いささか問題があるように思われます。

それは一つには、物事を単純化し「プロライフ＝生命尊重」対「プロチョイス＝選択尊重」といった一つの対立軸で捉え立場を表明するいわゆる「ワンイシュー(正確には Single issue politics)」の問題です。これは特に何事もないかのように見過ごされがちですが、様々な視点や論点を排除し、一つの争点を対立軸に大同小異の二つの立場しかないように捉えそこに押し込める、とても乱暴な方法に繋がりかねず、そこに教会が巻き込まれることになります。もう一つには当事者性のない聖職者の意見表明が、多くの人の反感を買うであろうという懸念です。

多くの方が一度は政治的立場に関するチャート、「政治的スペクトラム」をご覧になったことがおありでしょう。色々な種類がありますが、最も単純なものは光の分光のように極左、左翼、中道、右翼、極右と一つの次元でその立場を分類する「スペクトラム」そのものです。実際によく見かけるのはシンプルな直交する二本の軸に政治的立場をプロットする「政治的コンパス」と呼ばれるものでしょうか。これは本当によく使われます。その他にもいくつものチャートが存在しますが、それは物事を右か左かといった単純な軸で捉えられないからです。例えば、経済活動の自由と言えば右派のイメージがあると思いますが、かつてフランス革命期には左派の言説でしたし、近年の日本なら表現の自由は右派が強調するように見えますが、かつては左派の言説とされました。論点は一つではなくいくつもあり、個々についての意見があって一つの立場が形成されます。しかしご承知の通り、アメリカで中絶を合法化する契機となったロー対ウェイド判決が今年覆され、大きな政治的争点となっていますけれども、一つの大きな争点を軸に、大まかに二つの対立する立場にまとめて取り扱われ、社会の分断が起きています。そしてここに至るまで長年双方の立場の議論と運動があり、それぞれに参加する人々は多様であったにも関わらず、「保守対リベラル」や「宗教的人々対世俗的人々」と言ったラベル付けがなされています。ただ、プロチョイスとプロライフは、ロー対ウェイド判決を巡る議論においては対立的ではありますが、それぞれ重視する「選択の自由」と「生命の尊重」という二つの価値自体は、本来相互に排除し合うものではありません。個々人の自由を尊重しつつ生命を尊重する立場も成り立つはずなのですが、さながら選択の自由自体と生命の尊重自体がトレードオフのように理解されたり、一方の側に賛同することで直接問題と関わりない思想や政治的立場についても同じ見解を持つとされたりしています。

今回、「生命尊重センター」について教会内で公の立場にある人の賛同し後援する動きに対し、この団体と旧来の家族観や生活観、さらには政治的立場までも共有する背後の「宗教右派」としてまとめて批判されることが予想されます。しかしそれも安易に一つの論点のみで賛同することが招いた結果であると言えるでしょう。

ところで、円ブリオ基金と生命尊重センターの事務所は、幾度も移転しつつ長年ある企業の経営者一族の資産管理会社が所有する不動産を使用しています。これについてもその企業と経営と資本の面で深い関係のある企業の関連財団との関係が推定されることでしょう。特に、その財団

がもつ政治的立場との関係が。

10 月の祈りの集い

第 13 回「人類の一致を願って」

第 13 回シナピス主催「祈りの集い」を 10 月 13 日（木）に行いました。
テーマは「人類の一致を願って」、司式はサレジオ会の田村宜行（たむらのぶゆき）神父にお願いしました。10 月はロザリオの月ということで、ロザリオの祈りをお捧げしました。

集いのはじめに、四日市サレジオ志願院の中高生が作ったロザリオの祈りの説明動画を観ました。工夫をこらしたイントロ部分や分かりやすい説明は初めての方にはとても助けになりました。また青年たちの元気で明るい姿に力を貰いました。（そのほかにも楽しい要理動画を YouTube チャンネルにアップしています。下記リンクをご参照ください）その後田村神父はロザリオにまつわるご自身の体験談を歌を交えてお話しくださり、終始笑みがこぼれる楽しい集いになりました。

クリスチャンの家庭で育った田村神父は家族一緒に冬の寒い夜にろうそくを灯しコタツに入りながらロザリオの祈りを捧げたそうです。主の祈り、アヴェ・マリアの祈り、栄唱を組み合わせたロザリオは世界中で祈られています。言語は替わっても方法は同じ、いつでも誰とでも一緒にできるのが特徴です。現在では SNS（ソーシャルメディア）を使い世界中の人が繋がりこの祈りを捧げています。

「聖母マリアに何度も唱えることは私たちの母に呼びかけていること。あきらめずに祈り求める、そうすれば必要な事は与えられる」と田村神父はメッセージを締めくくりました。世界中の人々と平和を求めあきらめず願い祈り続けていくことで私たちは一致できるのではないかと思います。

最後に大阪星光学院合唱部のみなさんによるチマッティ神父作詞作曲の「アヴェ・マリア」をお捧げし集いを終わりました。男子生徒の力強い歌声は私たちにあきらめない勇気を与えてくれました。

田村宜行神父 YouTube チャンネル「サレジオキッズ聖歌」

▶▶▶

四日市サレジオ志願院　YouTube チャンネル

▶▶▶

次回は 11月10日（木）20 時半からです。
テーマは「死者のために祈る」
参加は下記 Zoom　ID＆パスコードを入力
または、QR コードからお願いします。
ID: 761 071 2034
パスコード:123456

みんなのけいじばん

住吉教会社会活動委員会の取り組み

紹介します！！

8 月 11 日～9 月 11 日　皆様から寄せられたシナピス支援の物資です。

シナピス事務所にて

　カトリック住吉教会社会活動委員会では、支援物資を集め寄付をする取り組みをされています。2 か月に一度集まったものを難民移住者支援としてシナピスに届けてくださっています。
主日のミサでお知らせの時間に、シナピスニュースで呼びかける寄付のお願いを見てくださり必要な物が集まるように声掛けをしてくださっているとのことです。
　シナピスに届けた後は、右上のような写真報告と次回までに集めたいものなどを文章にして、主日のミサの聖書と典礼にはさみ信徒の皆様に報告と呼びかけを継続しておこなってくださっています。

　物資を届けてくださる小島さんは常に優しく「どんなものが必要かニュースに載せてね！教会でみなさんに呼びかけます。みなさんも何が欲しいか分かった方が持ってきやすいと思うので」とおっしゃってくださいます。呼びかける私たちとしては、あれが欲しい、これが必要だと言いづらいのですが、実際にはその時々で移住者の方も入れ替わり必要とするものが変わります。支援する相手の事をまず考えてくださる住吉教会のみなさまの取り組みには本当に助けられています。

今後もシナピスは各小教区の社会活動委員会のみなさまと共にさまざまな問題に取り組んでいきます。どうぞ、みなさまのご意見をお寄せください。

2022年 インターナショナルデー

10 月 16 日(日)、3 年ぶりにインターナショナルデー(旧国際交流の日)を開催しました。お天気が心配されましたが、当日はとても気持ちの良い秋晴れで大勢の方と一緒にお祝いすることができました。

コロナ禍で規模を縮小し感染対策をしながらの開催になりましたが、出店、ステージを通して様々な交流ができました。また国境を越えて助け合いの精神が至る所で見受けられました。

お手伝いをしてくださったみなさま本当に有難うございました。

※当日の忘れ物がシナピスに届いています。お心当たりの方は 11 月末までにシナピスまでご連絡をください。

・ハーフコート(黒) ・マイクケーブル ・ビューラー ・サングラス(レンズのみ) ・T 字型金具(白)

連絡先▸▸ シナピス Tel: 06-6942-1784 E-mail: sinapis@osaka.catholic.jp

平和を愛するみなさまへ
ストラップをつけて“平和”を求める意思表示をしませんか！

1つ ￥300

＜製作者＞

アジア･太平洋地域戦争犠牲者 2000 万人一人ひとりの冥福を祈る会

この会は日本が再び戦争を起こさない様にと、戦後 50 周年を機にカトリック信徒の有志により結成されたグループで、犠牲者の悲しみや無念さに思いをはせ、『顔』を描き、祈り、講演会や戦跡地訪問などを企画しています。

ストラップご入用の方は、郵便番号、住所、氏名、電話番号、注文個数を記入の上、FAX またはメールにて申し込みください。

申込先: FAX 072-262-8144 Email:n.tatsuno@gmail.com

※送料は製作者で負担いたします、ご注文は 5 個以上でお願いいたします

※売上金の一部はカリタスジャパンを通してウクライナの支援といたします

カトリック大阪大司教区　社会活動センター
シナピス
Social Action Center of Catholic Archdiocese of Osaka

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ　～互いに耳を傾けよう～

シナピスの風

＊掲載行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。

第 154 号　2022 年 11 月 6 日発行

11 月の祈り

女性に対する暴力撤廃の国際デーの祈り

父なる神よ、
11 月 25 日は全世界で、
色々な形で暴力を受けて苦しんでいる女性の
現状を振り返る日になっています。
心が痛む現実は、毎日のように報道されています。
私たちは祈りのうちに、母親を初め、私たちを導き、
支えて下さった多くの女性のことを
思い起こして、感謝いたします。
全ての国に、あらゆる社会の中で、
女性の尊厳が尊重され、
その人権が守られるように、努力したいのです。
どうか、そのために働いている多くの人々と
力を合わせて、
あなたの心に適う世界を
築いて行くことができるように、
私たちの歩みを導いてください。
母マリアよ、
全世界の女性を温かく見守って下さい。
アーメン。

シナピスでは、毎月のお祈りをニュースレターとともにお送りしております。教会で、ご家庭で、日々のお祈りにお使いください。
シナピスのホームページからも、ダウンロードしていただけます。

ピース９の会２０周年の集い 『平和をつなぐ』

松浦悟郎司教来和❣ ゴロー司教さん、教えてください！！

日時：2022 年 11 月 23 日(祝・水)14 時～17 時
場所：カトリック和歌山紀北教会(旧・屋形町)
信徒会館ホール（和歌山市屋形町 3 丁目 33 番地）
『平和をつなぐ』報告集を当日、配布します！
こどもたちのために、絵本の読み聞かせもありますよ！
～時間のゆるす方は みんなで ティータイム～

オンライン祈りの集い　～世界平和のために祈る～

テーマ：死者のために祈る
11月 10 日(木)20 時半～(30 分)

Zoom ID＆パスコード(100 名まで参加可)
ミーティング ID：　761 071 2034　　パスコード：　123456

シナピスカフェ

★毎週水曜日　13 時ごろ～16 時ごろ
11 月の開催：2、9、16、30

★月１回土曜日 11 時ごろ～16 時ごろ
11 月は 19 日(土)

＊新型コロナウイルス感染対策のため、人数制限を行っています。
人数把握のため事前にご連絡ください。

シナピスホーム：生野区中川 6 丁目 6-23
☏：080-8940-8847

シナピス工房 クリスマスカタログ Vol.6

新作ができました！

今年もみなさまに喜んでいただけるクリスマスに向けて人気グッズや新作の作成に取り組んでいます。
クリスマスに贈るプレゼントは是非ともシナピスでお求めください♪

総額 3,000 円以上 ご寄付を頂いた方 に
ステキなプレゼントを１つ差し上げます！

2021 年正義と平和大阪大会 分科会録画(動画)限定公開！！

大会で開催された分科会の録画（動画）を編集したものを限定公開します。著作権に抵触する部分や個人情報保護に抵触する部分は削除・編集しています。その他も準備完了後、順次公開をしていきます。
教会のグループ学習等でご活用ください。
視聴方法や申し込みはこちら ▶▶▶
カトリック大阪教区ホームページ内
「正義と平和大阪大会」をクリックしてください。

シナピスでは 移住者や ボランティアの方々とともに ロザリオやカード、雑貨など をつくり皆さまにご提供させ ていただいています。ご寄付は難民移住移動者の生活支援に役立てられます。どうぞ、ご協力をお願いいたします。

シナピス公式 Instagram・LINE ができました！

さまざまなお知らせや情報を発信！
友達追加は QR コードから

支援のお願い

おかげさまでパスタ、体温計は沢山のご寄付をいただきました。
日持ちのする食品、ハラル食品、不織布マスク、
米、そして**レトルトのご飯**などのご支援をお願いいたします。

カトリック大阪大司教区 社会活動センター シナピス
Tel 06-6942-1784　Fax 06-6920-2203
URL: https://sinapis.osaka.catholic.jp/

「点訳版」「音訳」
ご希望の方はシナピスまで
お申込み下さい。

シナピス公式

さまざまなお知らせや情報を発信！
友達追加は QR コードから

CATHOLIC_OSAKA_SINAPIS_

活動へのご支援ご協力
よろしくお願いいたします。

郵便振替　00960-7-61419
加入者名　カトリック大阪大司教区シナピス

難民移住移動者支援もよろしくお願いいたします。

支援物資提供のお願い
米、ハラール食品、レトルト食品
テレフォンカード、不織布マスク
レトルトご飯、缶詰

お電話をお待ちしています！！
☎06-6942-1784

◀◀◀　HP はこちらから
https://sinapis.osaka.catholic.jp/

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

「外国人が暮らしやすい社会は日本人にも暮らしやすい」というスローガンのもと、宗派を超えたエキュメニカルの集い「INTERNATIONAL DAY」が開催され、すべての人が暮らしやすい社会を実現するために、「外国人住民基本法」制定のための請願署名も呼びかけています。35 年ほど前、在日韓国人の青年が私たち日本人に向けて「在日問題とか外国人問題とかいうけれど僕たちが問題か。この社会をつくっているあなたがた日本人が、日本人の、問題じゃないのか」と言われました。この日を楽しんでいる移住者たちの顔の向こうに、この青年の顔が見えました。（H）